

科学情報のリスクコミュニケーションにおける課題

広田すみれ¹⁾

東京都市大学・メディア情報学部¹⁾

リスコミは送り手・受け手の双方向性が重視される過程である。しかし、現在問題となっている低線量放射線の影響の説明等の現実場面では、核となる科学情報をいかに認知バイアス（心理的歪み）なく適切に伝え得るかもまた喫緊の重大な問題である。それは従来批判されてきたように送り手が情報伝達し受け手を意図した方向に態度変容させるパターンリズムによるものではなく、むしろ受け手が自分で不安感を解消し、対等な立場で積極的に共に解を探していくために必要だからである。そこで本講演では具体的な科学情報の1つとしてリスクを構成する重要な要素である確率を取り上げ、このリスコミに関する問題を取り上げる。報告者は社会心理学の立場からこの問題に関する研究を行ってきたことから、確率に関する認知に関わる定義や研究を紹介し、リスコミで不確実性に関わる際に留意すべき問題点をいくつか挙げる（時間に余裕がある場合は、もう1つの重要な要素である因果関係に関する認知の研究についても触れたい）。具体的には以下のような点について述べる。

(1) 「確率とは何か」についての複数の解釈の存在

科学哲学者イアン・ハッキング「確率の出現」による確率の起源と、確率解釈の問題

確率の本来的な二元性

(2) 確率伝達でのバイアスに関する心理学での知見から

ヒューリスティック&バイアス研究からの確率認知のバイアスの指摘

バイアス研究の再解釈：確率解釈を用いた Gigerenzer による議論と、「生態学的に妥当な」確率伝達研究

より理解しやすいフォーマット：時間単位と集団単位、1回事象と多数回事象

(3) 受け手側の問題：ニューメラシー（numeracy）と意思決定バイアス

(4) その他の問題